

美術の窓(137)

江戸時代の高級便箋など

大和文華館館長 浅野秀剛

前回の美術の窓で、ホノルル美術館のミッチェナーコレクションとレインコレクションのことを書いた。そして、ミッチェナーコレクションの絵半切のことを紹介したが、このところ私は、そのようなものばかりを調べている。正確にいうと、江戸時代の絵入りの用箋、つまり版画入りの高級用箋を調べているのである。版画入りであるから、多色摺版画の完成形である錦絵入りの用箋と言ってもあながち間違いではない。だから、広く考えると浮世絵の研究者が当然その対象とすべきものであるが、今まではほとんど誰も手を付けていないのである。

私が絵入り用箋に興味を抱いたきっかけの一つは、中国から輸入された詩箋である。詩箋は、読んで字の如く漢詩を書くための用箋で、17世紀から多色摺の詩箋が輸入され、大名・僧侶・儒者や富裕な町人によって使用された。日本での使用が漢詩に限られなかったのはいうまでもない。そうであれば、当然、それを真似て和製の詩箋が作られたはずだと考えたが、そういうものの紹介は皆無であった。その時から、和製詩箋を探す旅に出たのである。遅くとも19世紀にはいると、手紙や清書用の用箋を絵半切と呼んだが、絵半切を和製詩箋と同一に考えていいのかわからないことも頭の隅に引っ掛かっていた。

もう一つきっかけがある。それは、天明5年刊(1785)の『江都名所

図会』(2巻)について調べ、『北尾政美術『江都名所図会』の書誌・解題と類似作』(『浮世絵の美展』図録、岡山県立美術館、2008年)という小論を書いた時のことである。その中で、『江都名所図会』のような、絵本の体裁でありながら、その上に墨で文字が書かれることを想定して制作されたと思われるものを「絵半切の絵本」と仮に呼んだ。その後、未知の「絵半切の絵本」が続々と見出され、私もいくつか発掘した。

和製詩箋も絵半切の絵本も、広い意味で高級絵入り用箋に違いはない。であれば、そのようなものを広く調べてみようと思いついたのである。それは、浮世絵版画の主たる流れとはいえないが、版画文化の一端を担うものであることは間違いない。

調べていくと、書き込むことを想定して作られた版画、すなわち絵入り用箋は思いの外豊かな広がりをもつということに気付いた。一枚物では、和製詩箋・絵半切の類、掛け紙・のし紙の類、短冊の類、状袋・絵封筒の類があり、卷子・冊子・帖体裁のものでは、絵半切の絵本、清書巻、絵入折手本、罨本類、手習い本などがある。『江都名所図会』などいくつかの絵半切の絵本を例外とすれば、それらのほとんどは研究されたことがない。ここではそれらのうちから、八代市立博物館蔵の絵半切と兵庫県立歴史博物館蔵の絵入折手本を紹介したい。絵

入り用箋類に、ホノルル美術館の所蔵品のように絵師名が入っているのは稀で、今回紹介するものを含めてほとんどが無署名であることをお断りしておきたい。

絵半切(えはんぎり)とは、絵入りの半切紙の意味である。半切紙とは、中奉書や小奉書を横に半分に切り、書簡用にしたもので、書簡だけでなく、贈答用、清書用と広く用いられたようだ。標準サイズが16~19×45~53cmであり、八代市立博物館には、無地のものを含めて22種142枚所蔵されていた。すべて未使用のもので、八代城主(熊本藩家老)であった松井氏が参勤交代の時に購入して持ち帰ったものである。絵半切は、上に文字を書くことを想定して作られたものであるから、淡い色調の楚々とした図様が多いのであるが、「稲に蜻蛉」(図1)は、紙全体にモチーフを配したもので、洗練された趣を持っている。

八代市立博物館には、半切紙ばかりでなく、その倍のサイズの36余×50余cm、すなわち中奉書全紙の絵半切(全紙のものも絵半切と呼んでいたかは不明)も17種30枚所蔵されている。それらは、絵が下辺に集中し半ば以上が白紙となっている。「松葉に松毬」(図2)は、そのうちの1枚であるが、なかなか素敵なデザインで、こういうものを書いて贈ると、贈られる方も特別な想いになること必定である。

八代市立博物館には、熊本地震の後の6月1日に訪問し調査させていただいた。大変な時期にもかかわらず対応していただいた博物

館の皆様に感謝申し上げたい。

兵庫県立歴史博物館蔵で絵入折手本の調査をさせていただいたのは5月のことである。折手本とは、寺子屋で字を習うとき、師匠に手本を書いてもらうための折本である。大きさは永(長)手本が30~32×6.5~7cm、半手本が17~18×6cmほどで、その中間のものや更に小さいものなどもある。折手本に絵の入ったものが絵入折手本で、絵は1紙に1図描かれており、1図1図全部異なる。図様の主題は、稀に統一的なものを見出せないこともあるが、おおむね京名所、王朝風俗、忠臣蔵など明確である。外見上の特徴としては、錦絵入りの折本であること、使用したものは上に墨書の手本が書かれているが、未使用のものもかなり現存していること、折本をバラバラにしたものは、一枚の紙であるが折り目があることなどであろうか。兵庫県立歴史博物館の入江正彦コレクションには約80本の折手本がある。これは日本、いや世界最大のコレクションであろう。

「富士三十六景 下目黒」(図3)と「犬目峠」(図4)は、そのうちのひとつで、使用した1本の折手本がバラバラにされて10枚残された最初の図と最後の図である。葛飾北斎画「富嶽三十六景」から図様を取っていることは明白で、おそらく上方で制作されたものと推定されるが、当時の子どもはこういう手本で字を習っていた。

江戸時代の絵入り用箋を調べていると、今とは一味違った豊かさを実感する。



図1



図2



図3



図4

季刊 美のたより No.195

平成28年 7月 8日

発行 大和文華館